

マアジの新規加入量調査

(資源評価調査)

森脇和也

1. 目的

本県のまき網漁業や定置網漁業の主要漁獲対象種であるマアジの新規加入状況を早期に把握するため、日本海南西海域におけるマアジ幼魚の分布状況を推定するとともに同海域への新規加入量の推定を行う。また、得られたデータはマアジ対馬暖流系群の資源評価における新規加入量の指標値とする。

2. 方法

本研究では、(国研)水産研究・教育機構 水産資源研究所、鳥取県水産試験場および山口県水産研究センターと共同で、2023(令和5)年5月～6月にかけて、中層トロール網による一斉調査を実施し、その結果を基にマアジの新規加入量の推定を行った。

本県の一斉調査(1回目:5月22日～25日、2回目:6月5日～6月8日)は試験船「島根丸」により、島根県西部沖の14点で実施した(2回目は2点欠測)(図1)。曳網水深は30～50mとし、曳網速度は3ノット、曳網時間は30分間とした。一斉調査から得られた結果について関係機関と

共同で解析し、マアジの加入量指数を算出した。

3. 結果

マアジ幼魚の1調査当たり採集尾数は、1回目が1,345尾、2回目が3,296尾であった。

図2に2003(平成15)年の調査結果を基準としたマアジ加入量指数の推移を示した。一斉調査の結果から算出した2023年の加入量指数(平成15年を1とする)は0.70であり、昨年(2022(令和4)年:1.22)を下回った(図2)。

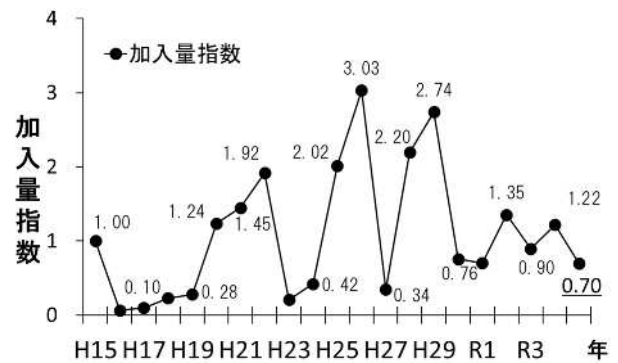


図2 マアジ加入量指数の推移

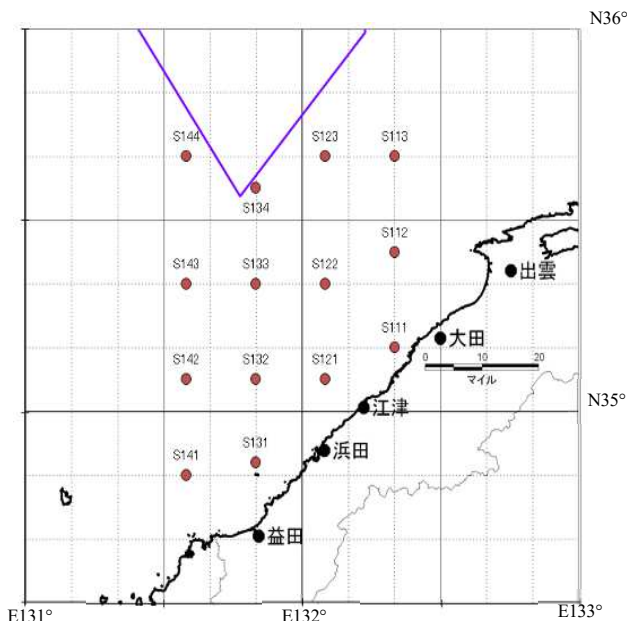


図1 マアジ新規加入量調査の調査点

4. 成果

本調査結果はトビウオ通信(令和5年第7号)で報告した。また、研究結果はマアジ対馬暖流系群の資源評価におけるマアジ0歳魚の指標値として使用され、これをもとにABC(生物学的許容漁獲量)が算定され、TAC(漁獲可能量)が設定された。